

2020東京五輪イヤー俺たちも!!

コート内外でコミュニケーション力磨き進化だ

スポーツ江戸川大学
2020年 〒207-0198千葉県流山市駒木474
www.edogawa-u.ac.jp

選手が
口をそろえる
「自分のプレーを
思いっきりさせてくれる場所」

「戦術は個々があてのもの」

1部への
道開け!! ドリブル
で攻め込む上原(9月)
陣を組む江戸川大バスケット
ボール部(9月)ゴールへ切
り込む大川(9月)バス
を出す渡部(左)。
右端は長橋

2部残留19年秋の課題を生かす

先導増田主将
「まだ不十分」
2019年秋のリーグ戦では白熱した戦いの末、2部残留こそ果たしたが、1部昇格はかなわなかった。上原敬太(経営社会4年、埼玉・西武学園文理高)は「各個人のスキルに磨き加え、それがチーム力つまる戦術面の足りない部分」となった。戦術は個々があてのもの、というリーグ戦を振り返る。その反省点を踏まえ、主将の増田修大(経営社会4年、千葉・市立船橋高)を中心に新チームは出発した。バスケットボール部は2種類のコミュニケーションを重んじる。コート外とコート上のコミュニケーションである。コート外に関しては、経営社会学科准教授の青木拓郎監督がコミュニケーションの映像などを仲間で見つ話し合う習慣が浸透し、主将を中心に選手同士で課題を洗い出すようになった。言いたいことは言い合えるし、チームとしての一体感はあるのである。

だがコート上ではコミュニケーションが「まだ不十分」と増田主将は話す。部としての一体感があるだけに「言わずとも通じる」と考えがちだが、目まぐるしく局面が変わるバスケットボールの試合でそう考えるのは危険だ。プレー中に確認を怠れば、事は思うように運ばない。

局面の判断力 試合中は、どの練習から意識
「できる限り部員全員としっかりコミュニケーションを取る」と練習から試合を想定した意思疎通を図る増田主将は、青木監督から多くを学んでいる。青木監督は練習中、自ら選手に声を掛けるだけでなく、増田に「ちょっとあいつに声を掛けて」と促すことがあるという。そういったやり取りを経て、自分では分からなかった自配りの仕方に気が付いた。

部員たちは口をそろえて「先輩後輩の隔たりがなく、自分のプレーを思いっきりさせてくれる場所」と言う。この学年を問わないコミュニケーションは、上級生と指導陣が長年かけて作った伝統であり、伝統を守るための努力は今も続いている。

スポニチ 監修
強化指定を
4部を大特集

2部 サッカー部
3部 女子バレーボール部
終面 女子バスケットボール部
編集後記

選手支える「日本一」の設備と充実スタッフ

日本代表もサポート星川トレーナーは心もケア



充実した専属スタッフと恵まれた練習環境が、江戸川大学男子バスケットボール部の強みになっている。「バスケットボールをする環境としては日本一じゃないかな」と星川精豪アスレティックトレーナーは自信を持って言う。星川トレーナーは日本オリンピック委員会強化スタッフとして日本代表のサポートトレーナーも務める。鍼灸師

の資格を持ち、早稲田大学大学院でアスレティックトレーニングを専攻した。江戸川大学では非常勤講師として「アスレティックトレーニング論Ⅰ、Ⅱ」の教鞭も取る。経験豊富なトレーナーとして強調するのが、手厚いサポート体制だ。男子バスケットボール部はABCの3チームに分かれ、経営社会学科准教授の青木拓郎監督と2人のコーチが指揮を執る。星川トレーナーはリハビリからトレーニングまで幅広く指導するだけでなく、施術中の会話を通して学生のメンタルケアをする役割も務める。「コーチや監督には話せないこともあるはず」とトレーナーならではの立場で学生に接する。



また2018年からは古賀賢一郎ストレングスコーチ写真二が加わった。古賀コーチはプロバスケットボールBリーグ2部の東京Zで

指導歴のある専門家だ。「学生の意識は劇的に変わっている。あとは継続すること。トレーニングというのは、時間がかかるが必ず成果の出るもの」と成長著しい部員に期待する。専属スタッフによる個人に密着した指導とともに、施設の充実が目玉を引く。バスケットボール部が優先的に使用する第二体育館は、いつでもフルコートの練習ができ、備え付けのトレーニングルームがあるため、筋力トレーニングのために場所を移動しなくてもいい。1部リーグ校にも負けない環境を整え、更なる上位進出を狙う。

江戸川大学

EDOGAWA UNIVERSITY

- 社会学部**

 - 人間心理学科
 - 現代社会学科
 - 経営社会学科
- メディアコミュニケーション学部**

 - マス・コミュニケーション学科
 - 情報文化学科
 - こどもコミュニケーション学科

